グローバリゼーションと環境破壊(1)

山　下　正　和

1．は　じ　め　に
2．グローバリゼーションとは？
3．グローバリゼーションと自由貿易
4．文化，自然の破壊
5．環境破壊への道
　5．1．悪循環の始まり
　5．2．合法的な植民地化？
　5．3．紛争・難民・砂漠化へ
6．なぜ途上国は豊かになれない？
7．出遅れた国はいずれは勝てるのか
8．グローバリゼーションと荒廃
9．お　わ　り　に

1．は　じ　め　に

同志社大学人文科学研究所第6研究会「世界経済のグローバル化の進展と周縁部の構造変化」の2004年度の第1回研究会（4月16日）の場で，「経済のグローバリゼーション再考」と題して一橋大学の伊豫谷登士翁氏が話をされた。そのときのレジュメの冒頭に，次のような文があった[1)]。

「“Globalization”は，人々の日常にのぼる言葉である。決まり文句となった一時的な流行語であり，人を惑わす呪文であり，現在ならびに将来の神秘の門を開く合い鍵である。ある人にとって，「グローバリゼーション」は幸福になりたければそうすべき対象であり，他の人たちにとっては不幸の原因でもある。」（アンダーラインは筆者による）

この文は，Baumanの著書の翻訳であろうと思われるが[2)]，上記の文の下線部が気になる。

世間では，いわゆる西側の資本主義グループの先進国のみならず，旧社会主義圏の国々をも巻き込んで，市場経済，自由貿易を原理とするグローバリゼーションが全世界を包み込もうとしている。あたかもグローバリゼーションでないと日も夜も明けないかのようだ。現在の社会では，このことは，あたかも自由に貿易ができ，非常に民主的な，より社会にとってふさわしいものであるようなイメージで捉えられている。特に物質文明を謳歌しているかのような日本の巷ではそのような声を聞く。本稿では，この「グローバリゼーション」がどういったものなのかを検討し，その益害について考察してみたい。

２．グローバリゼーションとは？

そもそもグローバリゼーションというのは，人間の諸活動が領域的，時間的制約を逃れて地球的規模のものになりつつあるという現実ないし感覚をさす言葉[3] とあるが，つまりはカネ，情報，ひいては物質文明を世界中に行き渡らせることではないかと思う。こう書くと，グローバリゼーションというのは「善」であり，あたかもいずれは世界中の人々が物質文明の恩恵に浴して豊かになり，みんなが幸せになれるように思えるが，実は決してそういうことにはならないようだ。物質文明というのは，20世紀にアメリカを中心に発達してきた大量生産・大量消費・大量廃棄の文明であるが，世界の現状を見ると，それがごく一部の国の人々のためだけのように見えるからである。

小・中・高等学校の時代に，いや大学においても「18世紀にイギリスに産業革命が起こり，科学・技術の発達によって地球上の人類は豊かになることができた」などと教えられた人も多いだろう。たしかに，日本にいて，とくにここ20年の日本の状況を見ていると，現在の物質的発展は加工貿易の結果として当然のことのように受けとられている。しかし，このような科学・技術の発達の恩恵を受けて豊かさを満喫しているのは，世界的規模で見るとごくわずかな国々，あるいは人々であることにすぐに気がつく。

世界の人口約60数億人を見ると，いわゆる先進国のなかでも，Ｇ７などと呼ばれている豊かな国に入っている人々がいて，全世界人口の約11％を占めている[4]。ヨーロッパ，北アメリカ，日本，それに韓国，台湾，シンガポールまで入れた国々でもせいぜい９億人であり，全世界の人口の６分の１にも足らない。日本人はＧＤＰが約32,500ドル／人（2001年）であって，その中でも上位，すなわち世界のトップクラスである。これが900ドル以下の国をとくに「後発発展途上国」と定義している[5]。

世界銀行によると，世界の半分近い28億人が一日２ドル以下で暮らし，５分の１にあたる12億人が一日に１ドルそこそこで生活しているといわれていて，日本人と比べるとその差が歴然としている[6]。上位14～15％の人々が世界のすべてのＧＤＰの80数％を持ち，貧しい方から数えて20％の人がたったの１％だけであるという状態で，残りの10数％を約60

%の人が分けあっているのだという。

要するにこれまでにこのようなはなはだしい格差がついている。しかもその格差は年々開いているという。その原因がグローバリゼーションではないかといわれている。いわゆるグローバリゼーションによって，富の集中と搾取が行われ，現在のはなはだしい世界経済での貧富の格差が生じているというのである。

3．グローバリゼーションと自由貿易

経済の面から見ると，グローバリゼーションというのはそもそも自由貿易であろう。自由貿易とは，国家が商品の輸出入についてなんらの制限または保護を加えない貿易で，輸入税，輸入制限，為替管理，国内生産者への補助金などのない状態のことである。ある国が自国で作ったものを安く売ることができ，また自由に貿易ができる。一見このようなシステムは，「自由」という名前に惑わされて，何も考えない人には当然あるべき正しい姿のように思え，制限を設ける方が歪んでいるように映る。ところがこのような交渉システムは得てして，はじめに金を持ち，物を持っている方が有利で，何ももっていない方が不利であるから，どうしても先進国の方が有利になる。畢竟，先進国の，たとえば巨大な資本力を持った多国籍企業のようなものがよその国に出かけていって，大もうけをすることになる。

もともと先進国では，産業革命によってもたらされた大量生産によって労働者一人当たりの生産量（生産性）を向上させ，その結果としてコストの低減をもたらし，その見返りとして賃金を上げてもらうことによって労働者自身も購買力をつけていった。当然ながら，そのうちに大量に作っている製品の販路を拡大しなければならなくなり，外国にそれを求めていく。持ち込まれてくる製品に見合うだけの対価（いわゆる物々交換でもできるようなもの）があるところはいいが，ない国が多いであろう。一般庶民ではそういうときには分割払いのような，いわゆるクレジット販売形式がとられて販路を拡大するのが常套手段である。同じ方式で，その製品を買った国では売った国に対して債務が増えていく。挙句の果てには債務の返済のために，これまでの生活形態や産業，文化を変えてでも先進国に支払いを続けざるを得ない。

4．文化，自然の破壊

こういったグローバリゼーションが始まってからまだ20～30年であるといわれている。ところがこの期間にいわゆる発展途上国の状態に大きな変化が出てきている。アフリカ，アジア諸国，さらにはいわゆる中東地域では大地から緑がなくなり，砂漠化が進んできているようだ。アフガニスタンの40年前のビデオを見ると，森林が青々と繁り，田畑も一面

に作物が生育していた。ところが現在は，よくテレビでも放映されるようにほとんど岩と砂の世界である。イラクも同様にほとんど砂漠しかテレビには映らない。内戦が続くアフリカの国々も同じである。これは砂漠化の時期が偶然にグローバリゼーションの展開時期とたまたま一致したということではなく，やはりグローバリゼーションによってこのようになっていったと見るのが素直であろう。

実際，グローバリゼーションというのはいわゆる途上国の側から見れば，何もいいことはないようだ。世界の経済が自由化，すなわち自由貿易化されていくと，これまでその国でそこに住む人たちが作っていた作物を作れなくなり，先進国が必要としているものを否応なく作らされることになってしまう。しかもそれらは安く買いたたかれるのがオチだろう。もちろん，これらの国がやがては工業的に発展して先進国に追いつくなどということは到底考えられず，これまで長い間平和に，心豊かに暮らしてきた社会，共同体も壊れ，さらに経済状態が悪くなっていく。

数年前にテレビの番組で，南米の高地に住む民族のことを放送していたが，もともとその民族は水を大事にし，その水のおかげで長い間平和に暮らしてきた。ところがその土地に石油が出ることがわかり，アメリカの資本が乗り出してくる。その国の政府役人と交渉して金にまかせて土地や利権を買い，石油採掘場を作った。当然のことながらそれまでの清潔な住環境は失われ，住民は他の土地に追いやられ，伝統的な平和な生活は破壊された。その後10年ほどして石油の採掘の採算が取れなくなり，アメリカの資本はさっさと引き上げたしまったという。あとには廃虚となった工場やパイプラインが残されてしまった。有史以来の長い間きれいで生活の中心であった水は，汚く漏れ出た原油や廃棄物のせいで元に戻ることはなく，村人の暮らしはもう元には戻れない。人々はその村を去り，今は散り散りになって都会の片隅に身を潜めているのだろうか。先進国の一部の人の一時の金もうけのためだけに，自然と調和して暮らしていた民族の文化が無残にも失われてしまったのである。こういったことが世界中で起こっている。

もともと地球上のすべての国ではみんなが心豊かに暮らしてきたようだ。アフリカもほんの40年前までは緑が豊かで，「アフリカのスイス」と呼ばれるほど森と湖のきれいなところもあったというが，今は見る影もない。ケニヤでも1960年ごろまでは，いたるところ野生の海で，その中に集落が島のように存在していたが，今は，人間の住む地域の中に野生の地が島のようにいくつか残されている状況だという[7]。昔の面影は見る影もなく，貧困と飢餓と内戦がこれらの国を襲っている。

人口爆発，砂漠化した国は例外なく，先進国と経済的に何らかの関わりがある国といえそうだ。

5．環境破壊への道

次のストーリーをみていこう。いわゆるグローバリゼーションの影響を受けて貧困，かつ不幸な状態に陥る地域に起こっていそうな例を具体的に書いたもので，よく言われるような話である[8)]。

5．1．悪循環の始まり

たとえば，ある国に昔からののどかな村がある。人々はここで自給自足ながら，心豊かに何百年，何千年と暮らしてきた。当然，それぞれの村には，「土地はみんなのもの」とか「一人占めしようとすると天罰が落ちる」とか「神が宿る森の木は切ってはいけない」といった類のきまりごとや掟もあったであろう。地域の自然に適応し，みんなで協力しながら平和に暮らしていた。こういった村々は，意外と現在の人が思っているより裕福なことが多いようである。どこの民族でも素晴らしい民族衣装があり，豪華な祭礼があったことを思うとある程度納得が行く。

ある日この村に見知らぬ人がやってきた。いわゆる先進国からの人で，お金やものを持っている。彼は，この村の隅っこで作っていたコーヒーを見つけて，これで一儲けしようとたくらむ。そこで，この村人にコーヒーの大量栽培と取り引きを申し出る。コーヒーは彼の国では作れないが，非常に重要な金になる商品であるからである。

「村の土地の半分をコーヒー畑にして作ってください。その代わり，食べ物は私たちが私たちの国から倍ほど運んできてあげましょう」。

お金を見せられ，見たこともないようなお土産を見せられると村人はおそらくこういった誘惑には勝てないであろう。たとえ返事を渋っても，現在のセールスマンと同じようにあの手この手でいい事尽くめの話を持ってくるであろうからいずれは承諾してしまうであろう。たとえば，「それでは病院とか学校も作りましょう」などと。ついにはその村では，これまで自給自足の食糧を作っていた土地の半分をコーヒー畑にし，コーヒーを作り出す。

さて，コーヒーを作り出せばこの村には2倍の食糧が送り込まれ，一見豊かになっていく。食糧が十二分にあり，その上医療設備もあるので子供らの死亡率も下がってくる。その結果人口はふえる。やがて人口ももとの2倍になってしまう。人口が2倍になれば，また食糧が不足してくる。かといって，この村で食糧を増産することはもはやできない。すでに自給自足が崩れているから，コーヒーの販売に依存するしか方法がなくなっている。すなわちコーヒーの生産量を増やし，さらに食糧の援助を求めることである。

もちろん先進国の彼はもっともっとたくさんのコーヒーを売って利益を上げたいと思っていることだろう。そこで両者の利害が一致し，村では残りの土地もコーヒー畑にしてし

まう。取引の拡大と人口増加の悪循環の始まりである。過去に，ブラジル，コロンビア，エチオピア，ソマリアではコーヒーで一時的に豊かになり，人口が増えている。コーヒー以外にも紅茶，胡椒，綿，ゴム，ピーナッツなどで同様のことが起こっているだろう。

５．２．合法的な植民地化？

上記のことを繰り返せば，再び人口がふえ，食糧が足りなくなるのは明らかである。しかし，もはやこれまでのような原始的な栽培によるコーヒーの増産はおそらく土地の限界で無理であろう。土地の広さの限界と，土地のもつ地力の限界である。すなわち，土地は使えば使うほど養分がなくなり，やせてくるからである。植物が育つのは土があるからこそで，土から養分が奪われればそこは不毛の地になる。土というのは「岩石の細かいくず，生物の遺骸，その腐敗物，微生物よりなっているもの」であって，たんなる鉱物ではない。地球表面には平均１メートル以下しかないといわれており，また１センチメートルの土を作るのに100年はかかるといわれているほど貴重なものである。土は大切にしなければならない[9]。「生」は人に土と書く。これは，人は土の上にあってこそ生きるということを意味しているようだ[10]。

そこで，限られた土地で生産性をあげる方向に向かうことになる。ところが，本来同じ土地で同じ作物を作りつづけると，すなわち連作をすると，土地がやせ，生産量や品質がしだいに低下する。いわゆる土地の酷使である。そこで農薬や化学肥料が投入される。ところがいったん農薬や化学肥料を使いだすと，それまでの生態系が狂い，さらに次々と新しい農薬が必要になり，しかも量も増えていく。やがてもっと生産性を上げるために土地が集約され，一部の人が多くの土地を所有することになり，地主と土地を手放した小作人という階級ができる。

少数の地主がいる状態の方が先進国の彼にとっては交渉しやすく，地主の利益を増やすという口実で新ビジネスを展開できる。働き手は多いほどいいので「生めよ，増やせよ」と出生率が増える。やがて機械化が始まるであろう。そうすると今度は人手が余り出す。失業の発生である。

こういった状況は，以前の植民地政策に共通のようである。ということは，そもそもグローバリゼーションというのは，いわゆる合法的な植民地化ということになるかも知れない。

５．３．紛争，難民，砂漠化へ

たまたまコーヒーを例にして上記のストーリーを書いたが，他の作物でも事情は同じである。やがて土地を奪われ，仕事がない人は生活に困り，新たに森林を切り開いたり，あ

るいは都会への出稼ぎが始まることになる。こういったときには民衆には不満がたまっているであろうから，小さな紛争が起こるであろう。だが，当然土地集約で富が集まりだした地主が抑え込むだろう。ここまでくると，もはや後戻りはできないようだ。

化学肥料，農薬，生産機械が導入され，生産性を追求すれば，やがて農地としての地力が低下し，農業自体が破綻する。本来の土がなくなり，下から砂や岩石が表れてくると何も生育しない荒れた土地，つまり砂漠になる。歴史的に見ても，過去に文明が栄え，土地の養分を収奪したところはすべて砂漠化している。過去の文明の没落の大きな原因であろう。古代文明として有名なエジプト，メソポタミア，インダス，黄河文明はほぼ5000年ほど前から栄えたが，その跡地はすべて砂漠になっている。サハラ砂漠もローマ帝国のために砂漠になったようだ。だから，たとえ現在は大穀倉地帯であっても，いずれは同じ運命を辿ってやがては砂漠化することを考えておかなければならない。そのときには食糧をどこから持ってくるかが大問題となるはずである。

さて，土地の収奪によりコーヒーなどが生育しなくなると，先進国の彼はさっさとその土地に見切りをつけて去り，地主は財産を持って国外へ逃亡する。残った不毛の土地にはどうしようもない人々が難民として残されるばかりである。

農薬，化学肥料，機械などの費用は債務として残っているだろう。もはや食糧もなにもできない村ではやがて奪い合いが起こり，紛争，内戦へと発展する。紛争に使われる武器は，もちろん先進国から買ったものであろう。ここまでくるとやっとマスコミが取り上げる。大量の難民を出す政治紛争となって初めて世界が注目するのである。「内戦で多数（大量）の難民が餓死寸前」などと。

6．なぜ途上国は豊かになれない？

富める人と貧しい人の貧富の差はこの30年で 2 倍以上に拡大したといわれ，豊かな先進国と最も貧しい発展途上国では，物価や人件費に約100倍の差があるのが現状である。しかも貿易をしようとしても，たとえば最先端の工業製品と原料資源とでは物々交換が成り立たず，必ず不公平な取り引きになってしまう。こうなるといわゆる経済力の大きい方が有利である。普通，物価の異なる二国間取引では，結果として物価の低いほうの国に借金が増える。先進国は原料を安く買うことができ，製品を高く売れるのでより豊かになる。逆に途上国は原料を安く売り，製品を高く買うはめになるのでより貧しくなる。例えば，トラクターの原料になる鉄を1,000円で売っても，買うトラクターは1,000万円であれば，到底自然な貿易はできないのは明らかとなる。

結局遅れて出発した国々では，たとえばピーナッツ，綿花，パームヤシといった一次産業の品物の輸出に限定されるか，先進国の工場がやって来て，安い労働力によって製品を

つくって外へ売りに出すしかないということになる。そういった地域ではもともとあった文化豊かな農村は崩壊し，一面の単一作物畑になり，山も海も荒れ，回復不可能な状態になっていく。当然のことながらそこで採れる作物などは安く買いたたかれ，いくら努力しても豊かにはなれず，ますます格差が開いていくばかりである。つまり，途上国は一次産品や原料資源を安く売り，高い製品を買うことによって債務が増える一方である。これによって先進国はより豊かになり，途上国はますます貧しくなっていくという悪循環に陥ることになる。

農産物においても，現在の穀物の最大生産国はアメリカである。石油の大量使用や科学技術の発達で肥料や農薬，機械類を安く使えるようになり，農民一人当たりの穀物生産量は飛躍的に伸びた。アメリカの人口は2.8億人であるが，約200万人の農民が 5 億人分の穀物を作っている。その結果，生産量の半分が過剰になり，国が補助金をつけて余分な穀物を海外に輸出する政策を取ることになる。そうでないと，国内で価格が下がり，競争に負けた農民が農業をやめ，大都市に失業者としてあふれることになりかねないからである。

国の補助制度があれば，輸出相手の市場価格と同じかそれ以下で輸出できるので，十分売れるだろう。それが続けば，相手国の農民が失業し，ますます売れることになる。こうして余った穀物を減らすことができ，国内価格も維持でき，自国の農民も守ることができる。こうした補助制度により，アメリカ，カナダ，ヨーロッパの農民は価格が保証され，いくら余分に生産してもよくなったという。

一方の輸入側であるアジア，アフリカでは安い穀物の供給を受けて農業は壊滅状態となった。日本でもそうであったように，生産性の低い農地の農民はやっていけず，廃業するしかない。しばらくは新たな焼き畑地を転々とするかもしれないが，最後には都市のスラムに集まる。ここでは先進国による食糧援助があって，死なない程度には食べられるという状況になる。

同じように工業製品を考えてみる。先進国で石油の力を借りて大量に織物を作ったとする。人が一生懸命に働いて作ったのではなく，石油と機械でやるのであるから大量生産ができる。その製品をもって他の国へ安く売りに行けば，その国の織物関係者の失業を生むことになる。

ものごとを一面的に考える技術者，研究者は，金儲けのため，特許を取るために一生懸命研究をするというのはどういうことかということを，たまには考えてみなければいけないようだ。

7．出遅れた国はいずれは勝てるのか？

現在は資本主義であり，資本が投資されて工業製品や農産物が得られる。たとえば農業

などの一次産業では，土地があって，その土地が生む穀物などを得るのであるが，決まった土地には生産の限度があり，投資にも自ずとその限度が現れる。いくらでも投資すればそれにつれて生産が上がるというものではない。ところが，現在の産業は少し違うようだ。その変化が，経済の自由化，金融の自由化，情報のグローバル化といわれていることによって起こってきたのではないかといわれている。

たとえば情報産業関連で見ると，パソコンのシステムではウィンドウズが支配的である。マッキントッシュが良かろうと悪かろうと，あるいはリナックスがあろうとなかろうと，結局は大多数が使う商品が必ず絶対的に支配的になってしまう。二番手がいいものであっても，いったん多数が使うと製品の質にはあまり関係なく支配的になる。同じような例ではビデオのＶＨＳとベータマックスに見ることができるようだ。ベータマックスの方が先にでき，しかも良いものであったということらしいが，販売戦略の差でＶＨＳが市場を支配したという話を聞いている。

そもそも実体経済の場合には，人がいて，材料があって，工場があって，製品がつくられる。ところが金融というのは実体のないものである。もちろん情報にも実体がなく，コンピュータのソフトにしろ，ビデオテープの映像や音楽にしろ，情報であって，実体があるものではない。いくらでもコピーができる。コピーをすればするほど，コストは安くなり，より儲かる。要するに一人勝ちしやすくなる。最近の情報産業も金融と同じようなとらえ方ができるだろう。

グローバリゼーションは，歴史的には1980年ごろから始まり，90年代の中頃に IT 革命と結びついて全面的に展開されてきたといわれている。日本でも IT 革命とか何とかと言って，情報化産業，IT 産業が有望視されているように言われて久しいが，そのわりには日本の企業ははかばかしい状態にあるとは言えないような事態が続いている。アメリカの一人勝ちのシステムになっていて，二番手，三番手は勝てないのかも知れない。

8．グローバリゼーションと荒廃

同志社大学経済学部の西村理教授によれば，日本の自動車がアメリカでよく売れだしたころ，アメリカ・デトロイトの自動車工場労働者の多くは失業したということである[11)]。逆もまた真なりで，アメリカやオーストラリアから安い農産物が日本にはいってくれば，当然のことながら日本の農民は失業し，農業はつぶれる。最近の状況を見ていると，日本は農業を捨て，工業で生きる道を選択したようだ。

このように，グローバリゼーションは，いわゆる国際的な分業化の方向と結びついているようだ。現在でも，もはや日本で米を作るのは非効率的だから，アメリカやアジアではタイで作ってもらえばよいというようなことを言っている人がいる。日本で米を作らない

となれば，水田がいらなくなって，これまでの日本の農村はなくなってしまう。代りになにができるのかというと，たとえば，半導体の工場や，自動車の工場，IT がらみの工場などができるのであろう。米を作らないとなれば，おそらく他の農産物もつくらないであろうから，畑もなくなり，山も荒れる。いずれは豊かであった自然が失われることになる。そういうことが日本人や日本の社会にとって本当に良いことなのか，将来にわたって合理的なことなのかということを考えなければならないところに来ているようだ。

発展途上国の中でも最も貧しいグループに入る国は，先進国に向かって資源原料を供給するだけの役割となって，その国は経済的には向上するどころかますます落ち込んでいく。しかも先ほどの例のように，作物の単一化が進んで自然や生態系が破壊されていく。自然というのは，様々な生物，生態系が入り乱れ，バランスをとってその地域にとっては最良のバランスをとってきたものである。それが何千年，何万年も続いた上でのものであるはずである。それが，コーヒーだけとか，ピーナッツだけとかということになると，あるいはエビの養殖だけとかになると，ものを生み出す肝心のものが荒廃していく。先進国の中でも日本などは，農産物はほとんど作らなくてもよくなったので，やはり自然の，いいかえれば農村の荒廃が起こっている。

9．お　わ　り　に

自然の中に人間が住んでいて，都市があり，田舎があり，土があり，森があり，海があり，川があり……というのが最も豊かな姿であろう。現在の経済の一つの指標であるＧＤＰにはこれらの豊かな恵みは数値としては入っていなかったであろう。現在は一応先進国は高いＧＤＰを積み上げている。しかし，この経済的にも心的にも真に豊かさのもとである自然の姿を破壊しながらＧＤＰがつみ上がっていくというのは，実は不自然な姿であるのではなかろうか。

私は農村で育っているので，太平洋戦争の終戦後15年ほどの農村の様子をよく知っている。今から思えば，流れる水は豊かできれいであり，山や谷からの水を各家は引いて飲み水に使っていた。農家にはその一角に牛小屋があり，人と牛がともに住んでいた。村にはごみらしいごみは見当たらず，清潔な感じがしていた。もちろん俗に「田舎の香水」と呼ばれるものもあったが，それはそれで今から思えばそれなりにきれいなものであった。

土の豊かな土地，それがある限り，その国は豊かであると思う。時代劇では江戸時代のお百姓さんは苦しい生活をしていたように描かれることが多い。あれは間違っていると思う。農村はもっと豊かであったはずである。それが証拠に，各村々には素晴らしい祭礼があり，御神輿があり，神社があり，寺もあった。太平洋戦争中でも都市は疲弊していたのに，農村は豊かであったことも，都市の子供が農村へ疎開していたことを思えば納得が行

く。

タイで一年間研究をされていた同志社大学神学部の原誠教授の話によれば，タイでは工業化がどんどん進み，農民の数が減ってきているとのことである。現在のタイは農産物の輸出国であり，まだ約70%の人が農業に従事しているということだ[12]が，このまま工業化が進み，農村が破壊されていけば近い将来，タイ国の食糧を賄うだけが精一杯になるであろう。とても現在のようには日本にも，他の国々にも輸出はできないであろう。その時に日本は食糧をどうするのか。今から本気で考えておく必要があると思う。

経済第一主義のあのバブル時代のときなどは，自然は単なるものにすぎないと考えていたようである。あるいは生物，人でさえ金もうけの道具ぐらいにしか考えていなかったのであろう。現在，その報いが出ているようだ。自然は破壊され，そのことは人間自身の破壊につながっている。つまるところ，環境破壊を阻止する考え方というのは，すべての自然物，生物，人間を敬い，大切にするという一種のアニミズムかもしれない。そういったことの対極にあるようなグローバリゼーションにはどうしても疑問符をつけざるを得ない。

参考文献および注

1）同志社大学人文科学研究所15期第 6 研究第 1 回研究会，2004年 4 月16日（京都）
2）Z. Bauman, “Globalization. The Human Consequences,” Columbia U.P., 1998, p. 1-2
3）Imidas 2004，集英社，p. 329
4）国際連合世界人口年鑑2000，Vol. 52，国連経済社会総局編，原書房
5）Imidas 2004，集英社，p. 332
6）レスター・ブラウン編著，地球白書2001-2002，家の光協会，p. 11
7）N. Myers, “Global Security,” in “Life Stories,” U. of California Press, 2000, p. 169
8）例えば，高木善之，地球村宣言，ビジネス社，1996，p. 118
9）山下正和，環境問題のほんとうを考える，化学同人，2003，p. 188
10）同上，p. 2
11）西村理，私信（同志社大学学際科目「科学を超えた領域」2004年 4 月22日講義より）
12）原誠，私信（同志社大学学際科目「科学を超えた領域」2004年 5 月 6 日講義より）